

282) 哀しみを包みかくして

悲しみをちょっと濃い目の お化粧で包みかくして
階段を登りつめると 穏やかに海が広がる
この街にわたしは生まれ この街にわたしは育ち
この街を愛してたのに この街があの日崩れた

悲しみをちょっと濃い目の お化粧で包みかくして
足取りをひきずるように 教会の坂を上った
悲しみの黒い喪服が もふく 六甲の風を孕んで ろっこう はら
底冷えは涙をこえて 容赦なくわたしを襲う おそ

悲しみをちょっと濃い目の お化粧で包みかくして
ふりかえる幼き日々は 誰よりも倅せだった
そして今このわたしだけ 残されてここに たたず 佇む
父母の さいご 最期の時を いつまでも忘れられない

悲しみをちょっと濃い目の お化粧で包みかくして
窓辺より見下ろす街は 変わり果て傷ついたけど
今はもう昔の姿 取り戻し元に還った
悲しみの人の心を いづこ 何処にか置き去りにして

悲しみをちょっと濃い目の お化粧で包みかくして
涙には子供のころの 倅せが映って消える
悲しみはなぜに大きく 倅せはなぜに小さい
神様に祈る言葉は もはやなく涙は枯れた

人はなぜこんなにも悲しいの 人はなぜこんなにも苦しいの
涙にはあのころの倅せが 倅せがありありと映ってる